

単元名:多文化共生と経済協力

氏名:濱島 築	学校名:大阪府立第二工芸高等学校	
担当教科:地理歴史科・公民科	実践教科:公民科 政治・経済	
時間数:4時間(45分×4)	対象学年:第4学年	人数:19人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標 ・日本と世界のつながりを理解し、国際協力の意義と実践について学び、多文化共生社会の実現に向けて考察を深める。 ・日系社会や国際経済の学びを通して、多文化理解の重要性を理解する。 ・多文化共生社会のあり方について考察し、生徒自身が今後意識すべき点について理解を深める。		
【2】 単元の評価 基準	(ア) 知識・技能	・多文化共生や国際経済について、講義、グループワーク、事例紹介を通じて理解を深めている。 ・異文化背景を持つ人々の視点を理解し、交流する際の適切な考え方や姿勢を身につけている。
	(イ) 思考・判断・表現	・海外の日系社会や国内の外国人コミュニティについて考察し、自分の意見や考えを効果的に表現している。 ・多文化共生社会において、自分にできる具体的な行動について考察し、それを明確に表現している。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	・グループワークにおいて積極的に発言し、グループ内での役割を責任を持って遂行しようとしている。 ・授業での問いかけに対して主体的に思考し、積極的に考察しようとしている。
【3】 単元設定の理由	第4学年の3クラス合同で授業を実施する。授業者はペルーを訪問した経験から多文化共生について深い学びを得た。この経験を活かし、生徒たちにも多文化共生社会について考えを深めてほしいという思いから本単元を設定した。また、政治・経済の授業で国際経済について学んでいる時期であることから、ODAやJICA海外協力隊の活動についても取り上げ、教科での学びとの連携を図りたい。 普段の授業では生徒の発言が活発で、議論が盛り上がることが多い。ただし、クラスメイトとの関わりに苦手意識をもつ生徒も複数いるため、グループワークでは適切な配慮が必要である。また、読解力や表現力に課題がある生徒もいるため、机間巡視の際に指示内容の理解度を確認しながら授業を進めていく。 写真を用いたワークショップを取り入れることで、生徒の興味関心を喚起し、主体的な参加を促したい。また、Chromebookを活用して意見集約を効率化するなど、ICT機器を効果的に用いることで、授業の本質的な活動により多くの時間を確保したい。 開発途上国への開発援助やJICA海外協力隊派遣について、支援する側とされる側という上下関係ではなく、対等なパートナーシップに基づく協力関係であるという認識を育みたい。 授業者がペルーに行き感じた、海外における日系社会の歴史について生徒たちが学んだり、多文化共生社会で必要な視点を生徒たちとともに考えたりできる単元にしたい。例えば、自分が海外の学校に転校するという仮定的な視点から、具体的な行動について考察を深められると考える。 多文化共生社会との関わりは、今後ますます増えていくことが予想される。この課題を自分のこととして捉えられるかどうかは、多文化共生社会についての深い理解が鍵となる。本授業を通じて多文化共生への理解を深め、理想の社会像や自分にできることについて考察することで、将来直面する様々な場面において、多角的な視点から考察できる人材への成長を期待している。	

【4】展開計画(全4時間)			
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	開発途上国への支援とODAの現状と課題について学ぶ	・スライドと授業プリントを用いて、開発途上国への支援とODAについて理解を深める ・日本の経済状況を踏まえたODAの拡大について考察する	・授業スライド ・ワークシート ・Chromebook
2 本時	海外の日系社会と日本における外国文化について理解を深める	・写真を活用したグループワークを通じて、日系社会への理解を深める ・日本国内の外国人コミュニティの現状について学ぶ ・異国での言語の障壁による課題について考察する	・写真 ・授業プリント ・スライド
3 本時	多文化共生社会の実現に向けた基本的な考え方を理解する	・具体的な事例を通して、当事者の視点から多文化共生を考える ・多文化共生社会の実現に必要な考え方を探究する	・映像作品 ・授業プリント ・スライド ・Chromebook
4	グローバル社会における経済格差と日本の役割を考察する	・SDGs採択の背景と意義について理解を深める ・NGO、国際機関、JICA海外協力隊の活動を通して、国際社会における日本の役割を考察する	・授業スライド ・ワークシート ・Chromebook
【5】本時の展開			
過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	○前回の復習、ODAと南米とのつながりについて触れる。 ・前時までの復習	・前時に出席していない生徒が、既習事項を大まかに理解できるよう留意する。(本時のみ、通常時は政治・経済を選択していない生徒も特別に参加)	・写真 ・スライド ・授業プリント
展開① (10分)	○写真を見て、日系社会について考える。【グループワーク】 ・南米の日系社会が読み取れる写真	・人との関わりが苦手な生徒への配慮。	・南米地図 ・ペルーの写真
展開② (20分)	○海外に日系社会が生まれた背景について知る ・写真の年代別並べ替え【グループワーク】 ・スライドによる講義	・細かく発問し、生徒の理解度をはかりながら、注意をひくよう意識する。	・写真 ・スライド ・授業プリント
	○日本国内にある外国人コミュニティについて考える ・外国人数の推移(国籍別) ・授業者が活動を通して知った事例の紹介	・細かく発問し、生徒の理解度をはかりながら、注意をひくよう意識する。	・スライド ・授業プリント
展開③ (5分)	○明日からペルーの高校に転校することになったら？ ・自身の考えを記入し、共有(本時では時間の都合上割愛)～前半終了～	・発問の意図が理解できているか確認しながら机間巡視を行う。	・授業プリント

展開④ (10分)	～後半開始～ ○映像「Born With It」を見る 問「あなたが先生であればどうしましたか？」 ・個人で考えた後にグループへ問「それはなぜですか？」	・人との関わりが苦手な生徒への配慮。 ・話が進んでいないグループがあれば、助言しながら机間巡視を行う。	・動画 「Born With It」 ・授業プリント
展開⑤ (10分)	○外国人が日本に来たら？【グループワーク】 問「自分にできることは何だろう」 ・授業者がペルーで出会った人物の例を挙げる	・場面ごとに考えられるようにプリントを工夫して作成し、助言しながら机間巡視を行う。 ・身近でもそういった事例があることを意識できるよう、理解度をはかりながら説明する。	・スライド ・授業プリント
展開⑥ (10分)	○授業者がペルーで出会った方の映像作品を上映し、アイデンティティについて考える。 ・どういった境遇の方だろう ・作成者のアイデンティティについて	・何を意識して映像を見るか、事前に確認する。 ・字幕が読めない生徒への配慮。	・映像作品 ・授業プリント
まとめ (10分)	○多文化共生社会について ・さまざまな境遇について復習 ・スライド講義 ○発問「多文化共生社会を生きていく上で、必要な考え方は？」 ・Formで回収し、時間があれば共有	・学んだ事例を列挙することで、パターンを整理する。 ・タイピングが苦手な生徒は紙へ記入。	・スライド ・授業プリント ・Chromebook ・タイピングが苦手な生徒が回答できるプリント

【授業実践の様子】

【フォトランゲージによるワークショップを行う様子】



【発問に対してグループや教員と議論する様子、授業風景】



【6】本時の振り返り

本授業では、生徒たちが積極的に発問に向き合い、真摯に答えを導き出そうとする姿勢が印象的であった。特にグループワークにおいて顕著な成果が見られ、普段コミュニケーションに苦手意識を持つ生徒も、ワークショップ形式の活動に主体的に参加することができた。様々な境遇の人々を題材として提示しながら話し合いを進める中で、生徒たちは自身の経験を振り返り、具体的なエピソードを共有するなど、予想以上に深い議論が展開された。

また、グループ内での対話を通じて、多文化共生に関する新たな気づきや視点が生まれ、生徒同士が互いの考えを刺激し合う場面も多く見られた。一方で、発問に対する答えの導出に時間を要したり、グループワークが予想以上に活発になったりした場面もあり、予定していた発問の一部省略や映像作品の上映時間短縮など、臨機応変な調整が必要となった。しかし、このような柔軟な対応により、生徒たちの学びを最大限に引き出すことができ、全体として非常に充実した授業となった。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

本単元を通じて、生徒の多文化共生に対する考え方に明確な変容が見られた。以下に、時系列に沿って生徒の具体的な発言を示す。

【第1時】ODAの拡大に関する問いでは、生徒たちは国内支援を優先する意見が多く見られた。

- ・「他国を心配して気を使うのは構わないが、自国にも目を配ってほしい。能登への支援とどちらが大事だろうか」
- ・「他国との関係性において、将来性を見越した投資を行うのであれば、現代の日本の若者に対しても、将来のために投資をしても良いのではないか」

【第3時】しかし、具体的な事例を学んだ後、生徒たちの視点は他者への共感と実践的な支援方法の提案へと変化した。例えば、外国人転校生への対応について

- ・「ある程度その子の母語を覚えて話しかけて、スマホを使って翻訳で話しかけてみる」
- ・「ジェスチャーだけで仲良くなる。その国の言葉も一緒に勉強する」

【第4時】さらに、単元終盤での多文化共生社会に必要な考え方についての意見では、より深い文化理解と柔軟な思考が見られるようになった。

- ・「郷に入っては郷に従えも大事だけど共存も大事。イスラム教徒に無理やり豚肉を食べさせるのが駄目なように、許容、理解することも大事なことだと思います!」
- ・「偏見を持たない、もしくは持っていて新しい知識にアップデートしていく」

これらの発言から、生徒たちが当初の自国中心的な視点から、より広い視野で多文化共生を捉えられるようになったことが明確に読み取れる。特に、具体的な行動提案や文化的配慮の必要性について言及できるようになった点は、大きな成長といえる。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

本単元を通して、生徒たちの学習態度と意欲に顕著な変化が見られた。特に、グループワークやワークショップ形式の活動を通じて、普段は発言の少ない生徒たちも積極的に参加するようになり、クラス全体の学習意欲が向上したように思う。これまで消極的だった生徒たちが、他の生徒との対話を重ねることで自信をつけ、徐々に自分の意見を述べられるようになっていった。

また、生徒たちの多文化共生に対する理解も深まり、単なる教科書的な知識ではなく、実生活に関連づけて考えられるようになった。授業での議論も活発化し、特に自分たちの身近な経験(アルバイト先での外国人との関わりなど)を踏まえた意見交換が増えていった。このような実践的な学びを通じて、生徒たちは多文化共生について、より具体的で建設的な視点を持てるようになった。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

授業開始時には、生徒たちは海外支援に対して慎重な姿勢を示していた。特に、能登半島地震などの国内の被災地支援との優先順位について疑問を投げかける意見や、若者支援など国内の課題解決を重視する声が目立った。また、外国ルーツの児童に対する固定観念も見られ、日本語が堪能な小学生の動画を視聴した際には、「日本語は話せないだろう」といった先入観に基づく発言が出るなど、無意識の偏見が存在することが明らかであった。

(授業後)

授業を通して生徒たちの意識は大きく変容し、ODAや多文化共生に対する理解が深まっていったように思える。「日系人について知ったら、海外への贈与や借款も必要だと感じた」という意見に代表されるように、当初は海外支援に慎重だった生徒たちも、その重要性を認識するようになった。多文化共生社会における相互理解についても、「郷に入っては郷に従えも大事だけど共存も大事。イスラム教徒に無理やり豚肉を食べさせるのが駄目なように、許容、理解することも大事」という具体的な発言が示すように、文化的背景や習慣の違いを尊重する姿勢が育まれていった。さらに、「自分が普通に生まれ普通に生きていけていることに感謝するし、急に自分の知らない土地に行くことになったら全く受け入れられない」という意見からは、生徒たちが自分の立場を相対化し、他者の視点で考察を深められるようになったことが分かる。「見た目だけで一括りに外国人だと思ってしまいが、実際は様々な状況の人がいる」という気づきや、「普通に接したらええやん」という率直な発言からは、多様性を自然に受け入れる柔軟な価値観が芽生えていることも確認できた。

【8】自己評価

1. 苦労した点

授業設計において最も重要な課題は、生徒の思考を深める発問づくりであった。単純な答えを求めるのではなく、グループでの対話を通じて多様な視点に触れ、他者の意見を参考にしながら理解を深められるような問いかけを心がけた。特に、多文化共生社会という複雑なテーマについて、生徒が自分事として捉え、主体的に考察できるような発問の構築に時間を費やした。また、多くの生徒が他者との関わりに苦手意識を持っている状況を踏まえ、グループ編成を慎重に行い、全ての生徒が安心して参加できるワークショップの構築に力を注いだ。グループワークにおいては、発言が得意な生徒と苦手な生徒のバランスを考慮しながら、互いの意見を尊重し合える環境づくりを意識した。これらの工夫により、徐々にではあるが、生徒たちが積極的に意見を交わし、学びを深める姿が見られるようになった。

2. 改善点

時間管理に関して課題が見られた点として、ワークショップに予定以上の時間を要したため、一部の発問と映像作品の視聴を第4時に振り替えることとなった。また、振り返りのためにホワイトボードへ発問を記入する時間を確保していたが、より効率的な方法を検討する余地があると考えられる。

内容面での改善点としては、ODAについての説明をより包括的なものにする必要性を感じた。具体的には、国外での活動だけでなく、国内での取り組みにも焦点を当てることで、生徒たちが多文化共生をより立体的に理解できると考えられる。さらに、授業者自身の経験や著名人の事例を積極的に取り入れることで、より実践的で印象に残る授業展開が可能になるだろう。

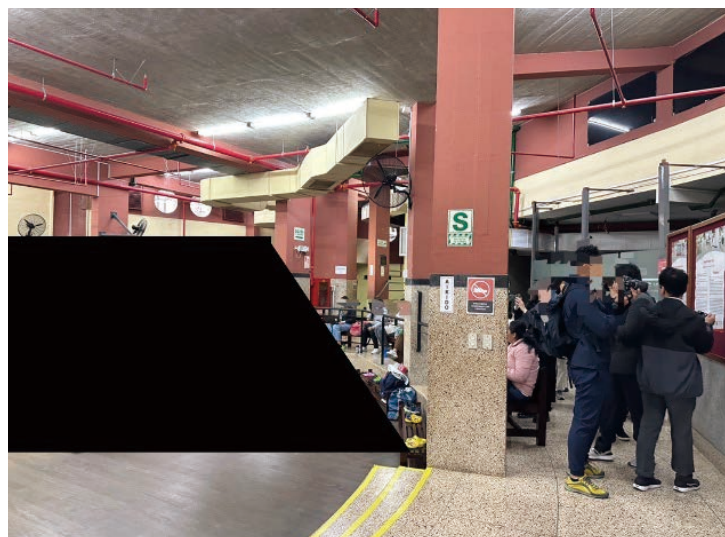
3. 成果が出た点

授業者の実体験に基づくペルーでの具体的な事例を交えた発問により、生徒たちは多文化共生について現実感を持って考察を深めることができた。特に、これまで外国にルーツを持つ人々との関わりについて深く考える機会が少なかった生徒たちにとって、この授業は異文化交流における適切な姿勢を考える貴重な機会となった。

	また、グループワークでは予想以上に活発な議論が展開され、普段コミュニケーションを苦手とする生徒も積極的に参加する様子が見られた。さらに、ODAなどの海外支援に対して当初否定的な見方をしていた生徒たちも、単元を通じて途上国支援の意義や具体的な内容について理解を深めることで、その重要性を認識し、より建設的な視点で考察できるようになった。
4. 備考	本単元の実践を通じて、生徒たちの多文化共生に対する理解と意識の深化が確認できた一方で、さらなる発展の可能性も見出すことができた。今回の実践で得られた知見を活かし、3学期には1年生を対象に、より改善された形での授業実践を計画している。特に、生徒たちの発達段階に応じた教材の選定や、より効果的なグループワークの手法を検討していきたい。 また、授業者自身も学校外での研修や勉強会への参加を通じて、多文化共生や国際協力についての見識を広げていきたい。そこで得られた気づきや学びを授業実践に取り入れることで、生徒たちとともにより深い学びを作っていけるよう努めていく。

添付資料：

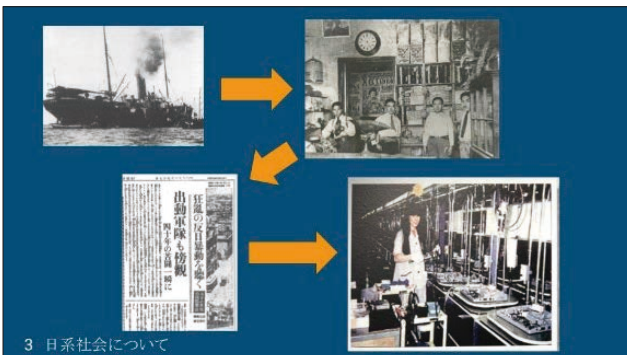
- ・「Born With It」<https://www.youtube.com/watch?v=yzfl9pAJkqg> (授業内で使用した動画)
- ・「UBICUA(ユビキタス)」(2022) (授業者がペルーで出会った方が作った映像作品 授業内で使用)
- ・日系社会を知るためのグループワークで使用した写真(授業者がペルーで撮影)



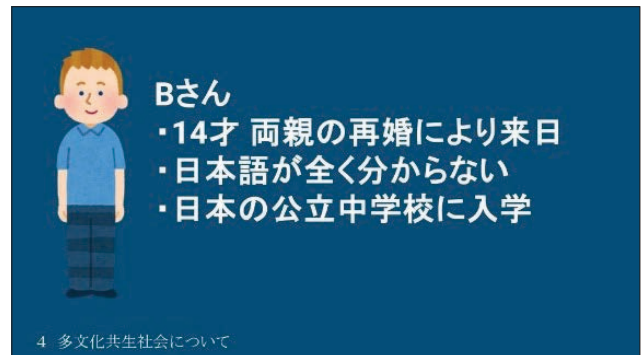
●スライド(一部)



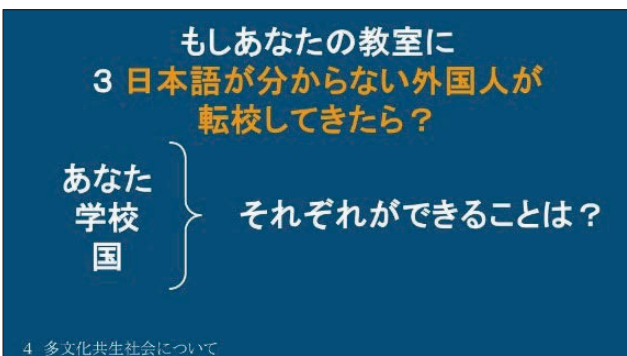
3 日系社会について



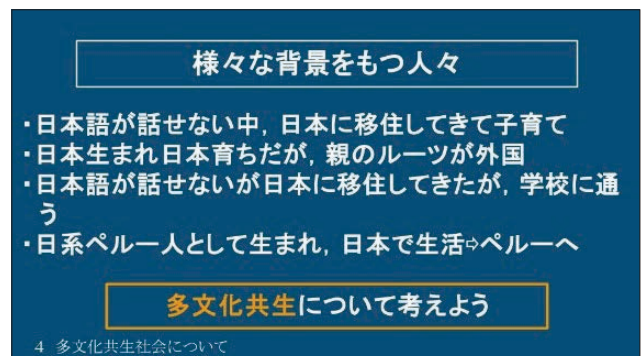
3 日系社会について



4 多文化共生社会について



4 多文化共生社会について



4 多文化共生社会について

参考資料:

- ・伊東光晴(他9名)(2024)『最新 政治・経済』実教出版
- ・細谷広美(編者)(2019)『ペルーを知るための66章(第2版)』明石書店
- ・片山和之(2022)『遥かなる隣国ペルー』東京図書出版
- ・神里雄大(2021)『超えてゆく人—南米、日系の若者たちをたずねて』亜紀書房
- ・外山尚之(2023)『ポピュリズム大陸 南米』日本経済新聞出版
- ・山中信幸(2024)『価値創造の本質に基づく学びのプロセス—教科学習における発問構成を柱に据えたPBL型授業の検討—』日本学校教育学会
- ・独立行政法人国際協力機構(2020)『mundi No.85 中南米 日系社会とともに歩む』
<https://www.jica.go.jp/Resource/publication/mundi/ku57pq00002kfsx7-att/202010.pdf>
- ・独立行政法人国際協力機構(2024)『JICA Magazine No.017 (2024年2月号) 特集 国際協力70周年』
https://jicamagazine.jica.go.jp/magazine/?date=2024_2
- ・外務省(2024)「ペルー共和国」(参照2024-12-07) <https://x.gd/kKsVC>
- ・外務省(2024)「2023年の各国ODA実績(暫定値)の公表」(参照2024-12-07) <https://x.gd/eQKtm>
- ・財務省「政府開発援助(OA)の概観」(参照2024-12-07) <https://x.gd/kS79E>
- ・JICA九州(2022)「多文化共生ってなんだろう?」(参照2024-12-07)
<https://www.jica.go.jp/domestic/kyushu/office/pr/index.html>